

# 上野国新田郡庁跡(太田市)

ここが上野国新田郡庁跡/標柱と説明板が立っている



# 国指定史跡

## 上野国新田郡庁跡

所在地 太田市天良町七一ほか  
指定年月日 平成二十年（二〇〇八）七月二十八日

上野国新田郡庁跡は、古代新田郡における郡衙（郡家）の中核施設です。この施設は、以前から礎石建物跡や炭化米の出土が知られていた天良七堂遺跡内に存在します。上野国内における郡衙の具体的な施設を記した『上野国交替実録帳』によれば、新田郡庁は東西南北に「長屋」を配置することが記されており、それに合致する長大な掘立柱建物跡が発掘調査により確認されました。郡庁は全国的にも例のない規模で、一辺約九十m四方（通常の大きさは五十m四方）に及び、四辺には長さ約五十mの長大な建物が配置されていました。

新田郡庁の時期は、出土遺物により七世紀後半から九世紀前半にかけてのものと考えられます。また、郡庁はこれまでの調査で、ほぼ同じ場所ですり替えられ、五段階の変遷をたどることがわかってきました。新田郡庁跡の周辺ですが、南側には古代の東山道駅路が通過し、東側には寺井廃寺、西側には瓦葺の基壇建物跡が確認された入谷遺跡や堀に囲まれた区画の中に大型の掘立柱建物跡が確認された笠松遺跡といった古代の重要遺跡が存在しています。

正殿…郡庁のほぼ中央で確認され、掘立柱建物から礎石建物へと建替えられていたことがわかりました。最盛期には正殿の前に前殿が建てられたこともわかりました。

正倉（米などを保管する倉庫）群…発掘調査によって、『上野国交替実録帳』の記載のとおり、郡庁の東・西・北側から検出されています。また、郡庁と正倉を取り囲むように台形状の外郭溝（東西約四百m・南北約三百m）が確認されています。



「上野国新田郡庁跡」航空写真



「上野国新田郡庁跡」推定復元図

平成二十六年（二〇一四）三月二十日

太田市教育委員会

新田郡庁は7世紀後半から9世紀前半にかけて存続したと云う



南側には東山道駅路が通過し、東側には寺井廃寺、西側には入谷遺跡や笠松遺跡が存在する



「上野国新田郡庁跡」航空写真

てんらしちどう

天良七堂遺跡で発掘調査された新田郡衙(郡家)内にある 上野国新田郡庁跡のエリアを南西側から見たところ





せいでん

正面の小型の赤いドラム缶を置いて柱位置が表示されているのが正殿跡/南側から見たところ



同じく北側から見たところ





これは西長屋建物跡/南側から見たところ



同じく北側から見たところ





これは東長屋建物跡/南側から見たところ



同じく北側から見たところ





これは北長屋建物跡/南側から見たところ





同じく東側から見たところ





同じく西側から見たところ



そこで北西方向を見ると前方にも小型の赤いドラム缶が見える





近づいてみる/これが郡庁の北西約80mで見つかった正倉跡のようだ





説明坂がある





## 正倉（しょうそう）

平成 20 年度に実施した発掘調査の結果、ここでは長さ 9.0 ～ 10.5m、幅 6.3 ～ 8.0m の大きさをもつ礎石建ちの建物跡がのべ 7 棟確認されました。これらの建物跡は、基礎を強固に造成し外壁の内側にも柱を立てる構造であることなどから、倉庫（「正倉」といいます）であると考えられます。

当時、ここは古代の郡役所である新田郡家の中でも税として徴収した稲などの穀物を収納する正倉が建っていた区域であったと想定されています。

ここで見つかった正倉は、建物同士の間隔が広く空けられて建てられていました。これは「倉を新造する場合は十丈（30m）以上離すように」と延暦 10（791）年に中央政府から発せられた命令（太政官符）を守って建てられたことによる可能性があります。

ここに並べられた赤色のドラム缶は、発掘調査で見つかった正倉の柱の位置を示しています。これらは 9 世紀の前半ごろ建っていたと想定されます。



納税風景（想像）

新田郡家跡についてもっと知りたい方は QR コードをスキャンして太田市 HP にアクセス！





調査で見つかった正倉の柱の位置（写真赤丸）を赤色のドラム缶で表示しています。（上空から 平成 21 年 1 月撮影）



こんな塩梅/奥にも小型の赤いドラム缶が見える/南側から見たところ





奥の正倉跡





左手の列/東側から見たところ/奥にも小型の赤いドラム缶が見える





奥の正倉跡





ここには延べ7棟の正倉があったらしい/南西側から全景を見たところ



これは郡庁の北側を西側から東方向に見たところで、このエリアにも正倉跡が発掘されているようだ





これは郡庁の東側から西方向を見たところで、この手前のエリアにも正倉が建っていたようだ



さて、ここは新田郡庁の東側にある太田市立強土小学校/前方の校内に説明坂が立っている





寺井廃寺は強土小学校から強土中学校にかけての地域に所在したと推定される/7世紀末頃に建立された豪族の氏寺

太田市指定  
重要文化財  
寺井廃寺出土瓦

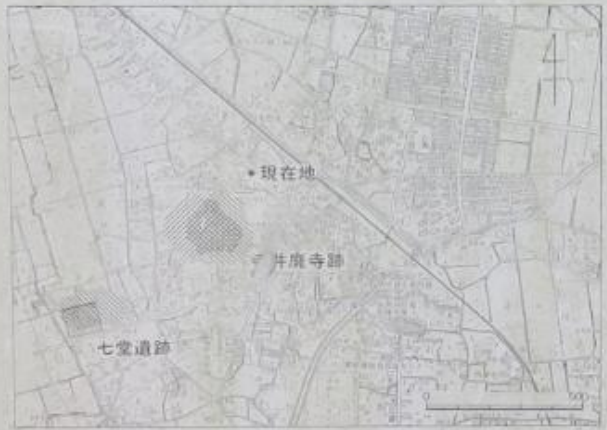
●所在地 太田市天良町八五八の二 強戸小学校  
●指定年月日 昭和五十一年(一九七六)十一月十六日

強戸小学校から強戸中学校にかけての地域からは、第二次世界大戦前から古瓦の出土が知られる。その後も鉄釘、金具、瓦溜、礎石などが発見されており、これらの出土品や、この地域が「寺井」「天良」という寺に關係のある地名であることから、古代寺院遺跡の存在が想定されている。しかし、その寺院の名称は、資料がないため不明であり「寺井廃寺」と呼ばれている。また、規模や構造などの詳細も本格的な発掘調査が行われていないため不明である。

出土瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。軒丸瓦には、上野国分寺式系の素文縁五葉重弁蓮華文瓦と、これより古い大和川原寺式系の面違鋸齒文縁八葉重弁蓮華文瓦などがある。

寺井廃寺は、有力な豪族の氏寺として、七世紀末頃(奈良時代白鳳期)に建立されたと推定され、東毛地域では最も古い寺院と考えられている。この頃、豪族たちは仏教の影響を受け、古墳のかわりに寺院を建立するようになったものと考えられる。

また、付近は、古代の官道である東山道の道筋にあたり、「新田駅」推定地にも近く、交通の要所であったと推定される。



須惠器片・瓦片の散布状況から推定した寺井廃寺位置図  
(歴史の道調査報告書「東山道」(群馬県教育委員会1983)所収地図から作成)  
凡例  
瓦片散布地域(なお、この南区域にも出土する)  
瓦片が特に多量に出土する地域  
須惠器破片・瓦破片出土地域  
教倉院跡と思われる地域(周囲の道まで達するか)  
(なお、七堂遺跡については、新田町教育委員会の調査により、さらに西および南西に広がっていることが確認されている。)

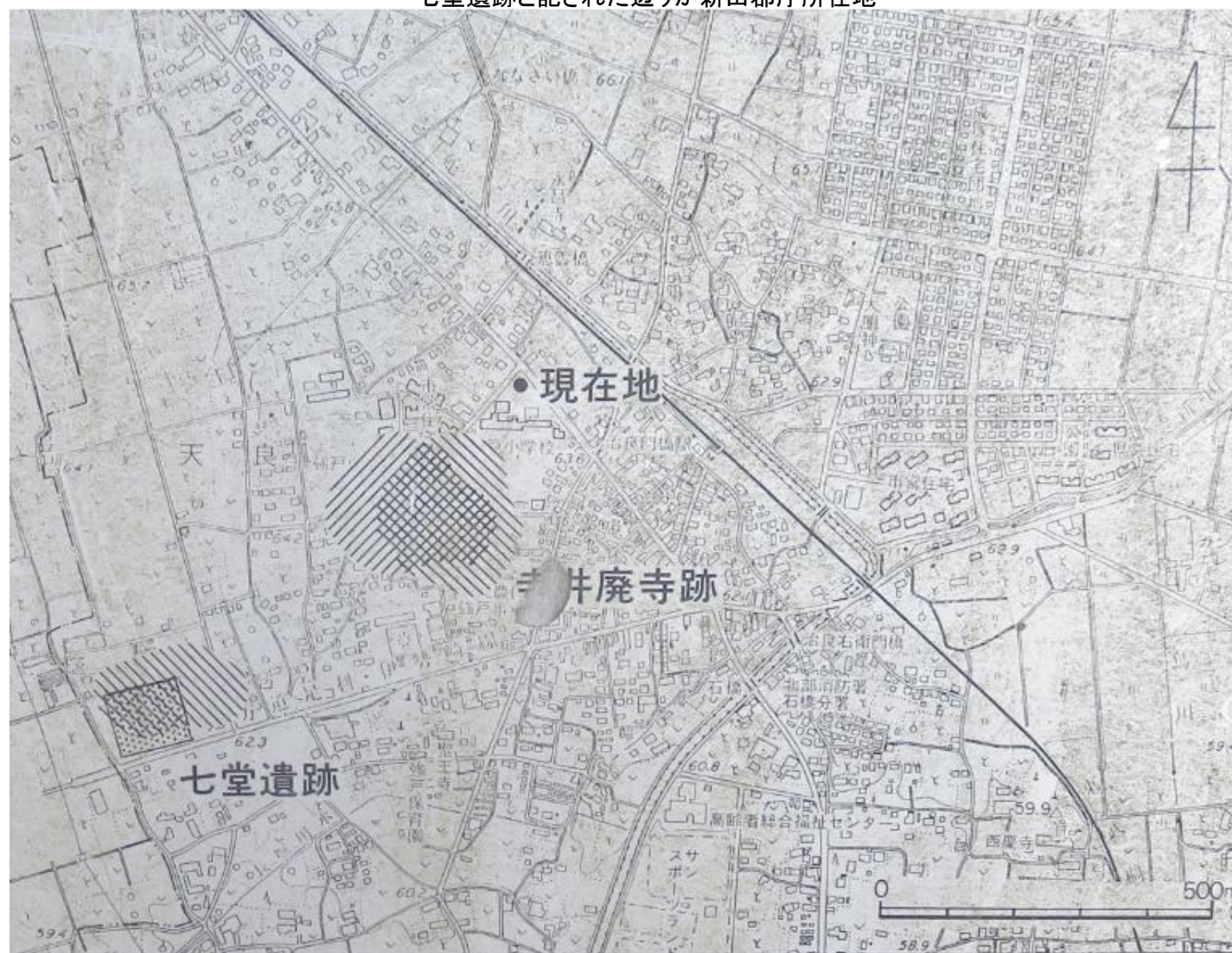
(注)地名について  
寺井廃寺があったとされる、強戸小学校から強戸中学校にかけての地域は、町名設定以前は、大字天良、大字寺井と呼ばれた。「天良」は、万葉仮名読みで「てら」となり、寺の意に通ずる。すなわち、「寺井」も「天良」も寺に關係のある地名である。

平成八年(一九九六)三月三十一日

太田市教育委員会



七堂遺跡と記された辺りが新田郡庁所在地



須恵器片・瓦片の散布状況から推定した寺井廃寺位置図



参考ホームページ

<https://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/topics/nittaguntyoato.html>

<http://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/topics/2015-1202-1507-131.html>

<http://beccan.blog56.fc2.com/blog-entry-3996.html>

[http://s.webry.info/sp/mkawa.at.webry.info/201802/article\\_3.html](http://s.webry.info/sp/mkawa.at.webry.info/201802/article_3.html)

